

*** 第21期会長就任にあたって ***

第21期同窓会会長
昭和52年卒 金属25期 河野 正一



大阪府立大学 金属・材料・マテリアル工学同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。平成29年11月5日の総会にて、第21期の会長に選出されました河野正一と申します。

私は昭和52年3月に金属工学科を

卒業し、昭和54年3月に大学院修士課程を修了しました。当時の第7講座で山本教授・稲数講師のご指導のもと、実験・研究をさせていただきました。その後、アルプス電気に入社し福島県相馬工場に勤務しましたが、27歳の時に大阪市中学校の理科教員となりました。こちらの方は何とか続き、教頭や教育委員会勤務を経て、小学校で3年、中学校で4年校長を務め、平成27年3月に定年退職を迎えました。その後も引き続き再任用校長として現在3校目となります中学校で勤務しております。本来ならば工業関係にお勤めの方がふさわしいと思いましたが、前会長の宮野様からお話があり、会長という重職を引き受けることとなりました。副会長の田村様や金野先生、他の役員の皆様と協力しながら、できる限り尽力したいと存じます。今般、大学を取り巻く環境は目まぐるしく変わってきています。最先端の研究はもとより、地域・社会に貢献できる人材の育成が課題であります。長年教育に携わってきた者として、何かお役に立てればと思います。

大阪市立大学との統合問題については、大阪府立大学、大阪市立大学の設立団体である大阪府、大阪市において、2019年4月に両大学を運営する2法人を統合する関連議案が府議会、市会にそれぞれ提出されました。法人統合した後もしばらくは、入試については大阪府立大学として実施し、入学から卒業までの教育カリキュラム、授与される学位についても影響を受けることはないということです。本同窓会も「工学部金属・材料工学科同窓会」という名称から「金属・材料・マテリアル工学同窓会」と改称することを総会で決定いたしました。これにより、広く入会しやすいようになればと考えます。今後とも、会員の皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

*** 会長退任のご挨拶 ***

第20期同窓会会長
昭和49年卒 金属22期 宮野 一雄



大阪府立大学 金属・材料・マテリアル工学同窓会会員の皆様には、益々ご清祥の段お慶び申し上げます。平成27年11月より2年間にわたり会長を務めさせていただき、皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。前会長 戎様・前々会長 橋

堂様と同期(49年卒)の者が会長をさせていただきました。次期会長は25期で、私と同様に大阪市中学校で校長をされている河野様が快くお引き受けくださいました。河野会長は真面目で何事にも熱心な方です。同窓会活動を更に発展させてくれるものと確信しています。新会長のもと会員の皆様方のご支援・ご協力お願い申し上げます。

さて、府立大学は今大きく変わろうとしています。大阪市立大学との合併問題が大きく報道されています。工学部同窓会も解散し、課程ごとの同窓会組織に移行しました。また、校内の組織改編で工学域、マテリアル工学課程となり、学生たちの活気が漲っています。

同窓会が共催する年間2回のマテリアル工学分野講演会では、学生たちが熱心に聴いている姿が印象的でした。また、毎年3月の学位記授与式後には、卒業・修了祝賀会を主催し、優秀な卒業生・修了生を表彰します。先生方のお話によると、研究内容が素晴らしい者がたくさんあり選考に苦慮したとの事です。同窓会としてこの様に熱心な学生達を少しでも応援できたことを喜んでいきます。

今後とも更に現役学生を応援していきたいと考えておりますが、当同窓会を続けるためには、財政健全化が必要になります。収入は皆様方の会費と寄付のみです。収入には限りがありますので経費削減しかありません。一昨年よりm t l ニュースの発行をホームページに掲載することにより、かなり成果が上がっていますが、まだまだ足りていないのが現状です。

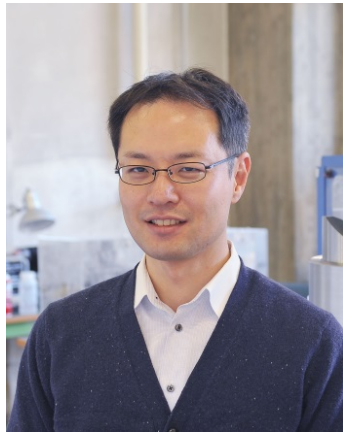
会員の皆様方の更なるご協力・ご支援をお願いすると共に、同窓会活動が益々充実することを祈念し退任のご挨拶といたします。2年間ありがとうございました。

*** 教員紹介 1. ***

超高压合成材料

研究グループ

『山田 幾也 准教授』



●はじめに

2017年度より、旧21世紀科学研究機構・ナノ科学・材料研究センターからマテリアル工学分野へ移りました。現在、遷移金属酸化物の超高压合成と触媒特性を主に研究しております。着任よりすでに1年半が経過し、所信・抱負を語るには遅すぎた感がありますが、これまでの研究人生におけるマテリアル工学との関わりを振り返ることで、決意を新たにしようと思えます。

●学部時代

高温超伝導体の研究をしたいと思い、京都大学工学部物理工学科に入学しました。3年進級時に機械、航空、材料、エネルギーの4つのコースに分かれることになっていて、府大の物質化学系学類での課程配属と同じく、極度の成績不振者は機械的に各コースに分散して配属させるルールとなっていました。当然、材料工学コースを希望しておりましたが、2年終了時に年齢と同程度の単位しかなかった私は、当然成績不振者として扱われ、エネルギー工学コースの中の原子核工学サブコースというところに配属されました。(全くもって自業自得ですが)仕方がないので、材料工学コースの講義を受講しながら、大学院から材料関係の専攻へと移るための準備をしておりました。なお、当時の材料工学専攻には沼倉宏先生が助教授として講義をされていたと思いますが、コースが違うこともあり接点はありませんでした。後々、テニュアトラック審査等でお世話になることを考えると、ご挨拶くらいはしておくべきだったと後悔しております。

●大学院時代

学内外の研究室のwebサイトを閲覧して、具体的な進学先を検討しました。20世紀末時点では研究室のwebサイトで提供される情報はそれほど多くなく、それなりに苦労して探した気がします。物理より化学の方に興味があったこともあり(それでも物理系の学科に入学したのは、化学系は学生実験・実習がとても大変だという話を聞いていたため)、京都大学化学研究所(大学院は理学研究科化学専攻)で高野幹夫先生が行っていた高温超伝導体の高圧合成に興味を持ちました。外部からの受験者に対してもオープンな専攻だったため受験することを決めてからは、院試勉強に集中し、なんとか合格しました。

大学院入学後は心機一転し勉学・研究に打ち込むつもりだったのですが、やはり学部の5年間で身につけてしまった怠け癖は容易に抜けきることがありませんでした。幸運にもM1の終わり頃に念願の新しい超伝導体を発見してからは、結局、博士後期課程修了までダラダラと過ごしてしまいました。なお、当時の化学研究所には、比較的近い関係にある研究室の助教授に高橋雅英先生がいらっしゃいました(が、特に接点を持つこともなく過ごしてしまいました)。後々府大のテニュアトラック公募にアプライする際、府大の研究環境などの情報を教えて頂くことになるのですが、面識がなかったのも、やはり激しく後悔することになりました(高橋先生はその点を気にすることなく親切に情報提供を下さりしましたが)。

●ポストドク時代

そんな状況でしたので、学位取得後のプランもはっきりしないところに高野先生からパリでポストドクの話があるから行ってみてはと勧められました。さすがにこれは人生最後のチャンスだと思いましたので、学位取得後1年間を高野先生の研究室でポストドクとして過ごした後、2007年4月よりパリ第6大学へポストドクとして移りました。パリでの生活は刺激的な一方、ピンセット1本購入するのにも数週間かかるという具合だったため、なかなか研究が進みませんでした。渡仏後半年もしないうちに日本でのポジションを探し始めたところ、これまた運良く2008年4月より愛媛大学の理学部化学科に助教として採用されることになりました。

●愛媛大助教時代

愛媛大には、世界的にも有名な高圧地球科学の研究センター(地球深部ダイナミクス研究センター)があり、入船徹男センター長や西山宜正助教(現・東京工業大学フロンティア材料研究所・特任准教授)の支援の下、現在の研究の基盤となる超高压合成法(十萬気圧・千°C程度での超高压高温条件での物質合成法)を用いた新物質探索の研究を開始しました。それまでも6~8万気圧程度での(普通の)高圧合成ではかなりの回数の実験を行っていたのですが、やはり十萬気圧以上の超高压は非常に強力で、とりあえず思いついた新物質の合成を試していったところ、次から次へと合成に成功しました。

愛媛大で3年が経過した頃、次のポジションを本格的に探し始めたところ、府大でテニュアトラックの募集があるのを見つけ、アプライしました。当時の私にはハードルの高い選考でしたが、なんとか採用に至りました。

なお、府大にアプライする6年ほど前から森茂生先生とは共同研究を行っており共著論文も出していたのですが、やはりご挨拶する機会もないまま、ヒアリングの場で初めて対面するに至りました。ここでも私は過去の自分の不作為を後悔することになりました。

●府大テニユアトラック講師時代

愛媛大で助教を4年間務めた後、2012年4月より府大のナノ科学・材料研究センターで特別講師（テニユアトラック講師）として独立した研究室を運営することになりました。潤沢な予算と時間がある一方で、コンスタントな学生配属がないためにマンパワー的に非常に難しい期間でした。そのような中でも、マテリアル工学分野からは5年間で3名の学生と一緒に研究を行ってもらい、それまでに取り組んでいた遷移金属酸化物の電子物性から電気化学触媒へと研究テーマを大きくシフトすることにも成功しました。ナノ科学・材料研究センターでは同僚とのインタラクションも活発で、特に八木俊介先生（現・東京大学生産技術研究所・准教授）には触媒評価の肝である電気化学測定装置の立ち上げに強くコミットして頂いたことで、電気化学触媒材料の研究がスムーズに立ち上がりました。

●おわりに・マテリアル工学分野に移って

5年間のテニユアトラック期間が終了し、新たな所属先を決定することになりました。複数の専攻・分野について慎重に検討を行い、マテリアル工学分野にお世話になることにしました。2001年に工学部を卒業して以来、16年ぶりに工学系の部局に戻ってきたこととなります。常々、府大の学生は応用指向が相当に強いと感じておりますが、こちらも上述の研究内容のシフトにより、ある程度は学生のニーズに対応できるようになってきました。現在、研究グループの構成としては、准教授（山田）の他にはM2・1名、M1・5名、B4・2名という比較的小さな集まりですが、学生が熱心に研究に取り組んでくれているおかげで、次から次へと新しい研究成果が出ております。だらしのない学生生活を送った者としては、毎日大学に来て研究しているだけでも十分だと感じておりますが、一方で自分の学生時代を基準にして判断しては、育つはずの人材が育たないのではという思いもあり、本心とは裏腹になるべく厳しく指導するように心がけております。普段は教員として立派なことを言っておりますが、このような程々にサーキュレーションが限定された媒体を通じて学生自身が教員の学生時代を知り、相対化できるようにしておく、良い意味での心の逃げ道になって良いかなと思った次第であります。

終わりに、本稿を書いている最中に気づいたのですが、これまでにマテリアルもしくは材料と名の付く組織に所属したことはなく、40歳にしてようやく初めて本来の場所に来たという感じがします（ナノ科学・材料研究センターは、英語名 Nanoscience and Nanotechnology Research Center なので微妙に違う）。研究人生は残り約半分となりましたが、これからは名実ともにマテリアル工学を担う者として、研究と次世代の人材育成に邁進したいと思います。

*** 教員紹介 2. ***

ナノテク基盤材料

研究グループ

『岡田 健司 特別助教』



1. 自己紹介

生年月日：平成元年4月
出身地：兵庫県淡路市
専門分野：ナノ材料、多孔質材料、無機材料、有機-無機ハイブリッド材料

[学歴]

平成20年4月～平成23年3月：大阪府立大学工学部 マテリアル工学科(飛び級進学のため中退)

平成23年4月～平成25年3月：大阪府立大学大学院工学研究科 物質化学系専攻 マテリアル工学分野 博士前期課程

平成25年4月～平成26年9月：大阪府立大学大学院工学研究科 物質化学系専攻 マテリアル工学分野 博士前後期課程

平成26年9月、博士(工学)取得(大阪府立大学大学院工学研究科)

[職歴]

平成25年4月～平成26年9月：日本学術振興会 特別研究員(DC1)

平成26年10月～平成27年10月：日本学術振興会 特別研究員(PD) フランス モンペリエ大学

平成27年11月～平成29年10月：大阪大学 工学研究科 応用化学専攻 助教

平成29年11月～現在：大阪府立大学大学院工学研究科 物質・化学系専攻 マテリアル工学分野 テニユアトラック助教

2. 初めに

大阪府立大学 金属・材料・マテリアル工学同窓会の皆様、初めまして。平成29年11月より、マテリアル工学科にテニユアトラック助教として着任しました岡田健司と申します。私自身、マテリアル工学科の出身で、博士の学位を取得後、1年間のフランス留学、他大学での2年間の助教を経て、マテリアル工学分野に教員として戻ってまいりました。私が学生時代にお世話になった先生方も多く、また、偉大で各分野で活躍されている先輩方、後輩を排出してきたマテリアル工学分野に教員として戻ってきたことは嬉しさ、安心感の感情と同時にこれまでの良い伝統を引き継ぎ後世に伝承していかなければならないという気持ちで身の引き締まる思いであります。

現在のマテリアル工学科は金属工学、材料工学科と時代の流れとともに学科名が変化し、残すべきところは残り、新しく取り入れる部分は取り入れており、金属だけでなく、様々な分野の“材料”が融合した他の大学、学科にはない非常に魅力的な学科になっているのではないかと思います。このように魅力的な学科となったのも、本同窓会の皆様の暖かいご支援、ご協力あつてのことかと思ひます。感謝申し上げます。また、今後のマテリアル工学科の更なる発展のためには皆様の継続的な支援が必要となるかと思ひますので、引き続きよろしくお願ひいたします。

昨今、大阪府立大学は大阪市立大学との合併が話題となっておりますが、今後も、金属工学、材料工学科、マテリアル工学科の伝統や魂を引き継いでいけるように日々学生指導、研究に励みたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

3.研究内容

本項では簡単に私が現在行っている研究について紹介させていただきたいと思ひます。現在、「ナノサイズの穴が同じ方向を向いた多孔質薄膜による電子/光学デバイスの開発」といったタイトルで研究を進めております。

「ナノテクノロジー」という言葉が一般的に成りつつあるように、我々の身のまわりでも多くのナノテクノロジーが利用されています。原子～ナノスケールの物質は、その距離や向きなどを3次元で制御することで、物質そのものが持つ機能を最大限発揮することができるだけでなく、新機能の創出も期待できます。しかし、有機分子やポリマー、金属ナノ粒子などの単分子～ナノスケールの物質を基板の上で積み木の様に自在に配置することは困難です。私は、多孔質材料である金属有機構造体(MOF)あるいはPCP)のサブナノ～数ナノメートルスケールの均一かつ規則的な細孔を「箱」として用い、単分子～ナノスケールの物質の距離や向きなど制御して導入することで高機能電子/光学デバイスの開発を目指した研究を進めています。

単分子～ナノスケールの機能性物質を規則的に配列するための「箱」としてMOFの細孔を利用した研究はこれまでも行われており、優れた特性が報告されています。例えば、MOFの細孔に規則的に導電性分子を入れることで、高い導電性を示す薄膜の形成や、プロトンを持つ有機分子を規則的に包括することで、高いプロトン伝導性を示すなど先駆的な研究がなされてきました。そのため、MOFを利用した高機能デバイス開発が期待されていましたが、

上記研究は単結晶粒子や多結晶薄膜のMOFでのみ達成されており、ゲスト分子の精密な配列制御は数 μm の領域の空間に制限されていました。論文や学会で指摘されていたのですが、MOFを用いたデバイスの実用化のための最も大きな障壁の一つが実用的なスケールで細孔の向きをそろえるMOFの配向成長です。実用的なスケールでMOFを配向させることが出来れば、大面積でゲスト物質の配向性、間隔、機能性を制御する事が可能となり、ナノ多孔材料によるユニークな電子・光学デバイスの実現が期待できます。そのため、様々なMOFの配向成長の方法が提案、実証されてきましたが、大面積でMOFの配向成長、すなわちMOFの穴の向きを揃える事はできていませんでした(図1a)。そこで私は、既存の手法とは一線を画し、水酸基が表面に規則的に配列している金属水酸化物を基板として用い、表面水酸基とMOFの有機配位子の空間的な整合性をとることによるMOFのエピタキシャル成長および、配向成長に取り組んでいます。現在までに、格子整合性が良い金属水酸化物-MOFの組み合わせを選択することで、初めてMOFのエピタキシャル成長および大面積での配向成長に成功しました[Nature Mater., 2017, 16, 342] (図1b)。

本研究で得られた配向MOF薄膜は、図1で模式的に示したように既存の手法で合成したMOF薄膜と異なり、大面積(cmスケール以上)でナノサイズの穴の向きが一様に揃っています。そのため、異方性の分子を配列して入れることで、機能の増幅やこれまで実現できなかった新規応用が可能となります。例えば、合成した大面積で穴が一方向に向いたMOF薄膜に、異方的な形状の蛍光分子を入れることにより、試料に入射する偏光角度を変えることで色素が光ったり、光らなかつたりする、蛍光をON・OFFスイッチング可能なセンチメートルスケールの薄膜を作製することにすでに成功しています(図2)。

現在は、多彩な細孔サイズ、形状、化学的性質を有するMOFを大面積で配向成長させる技術を確立し、ゲスト分子の配向、間隔を制御し、MOF自体の機能性と相乗的に機能化させることで、多機能電子・光学デバイスの開発を試みています。ナノサイズの穴が同じ方向を向いた大面積配向MOF薄膜の実現は、応用展開を考える上で切望されていた結果であり、今後電子・光学デバイスの大幅な特性向上や、n型半導性を示す配向MOF薄膜の細孔内でp型半導体高分子を形成することで、MOF細孔一つ一つがトランジスタの役割を果たすナノエレクトロニクスなど新規多機能デバイスの開発を行いたいと思ひます。

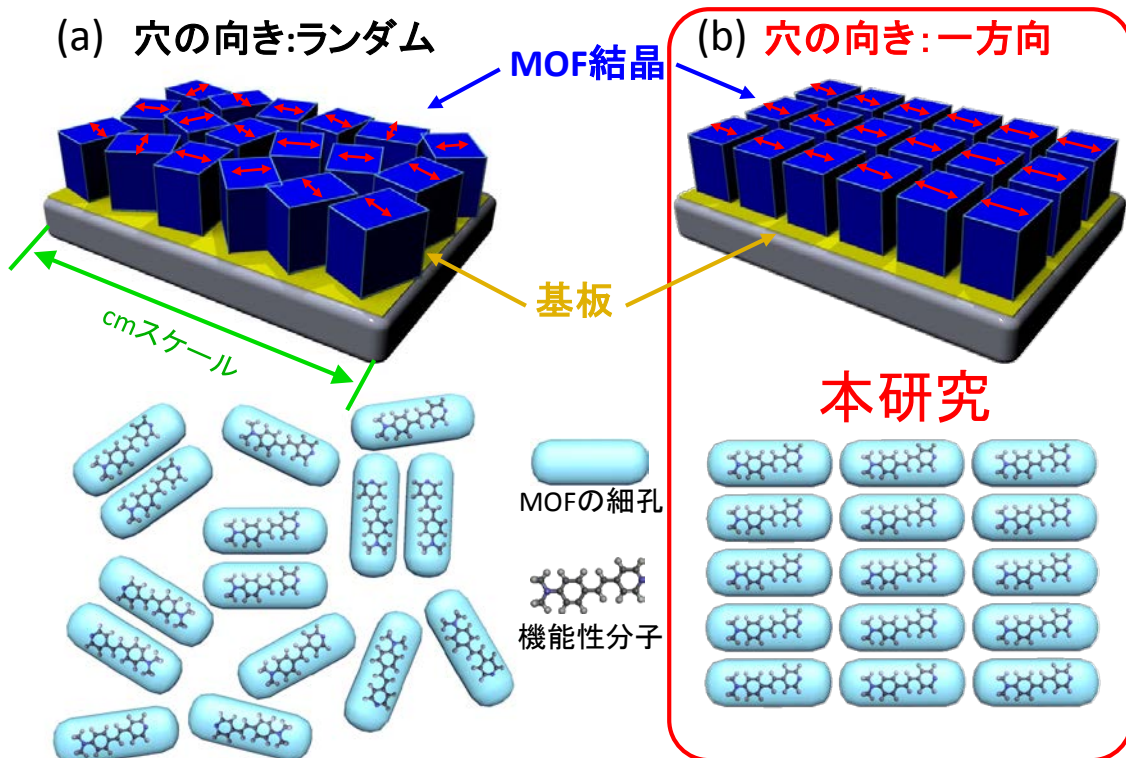


図1 既存の方法で得られるMOF薄膜(a)と本研究手法により得られる配向MOF薄膜(b)の比較

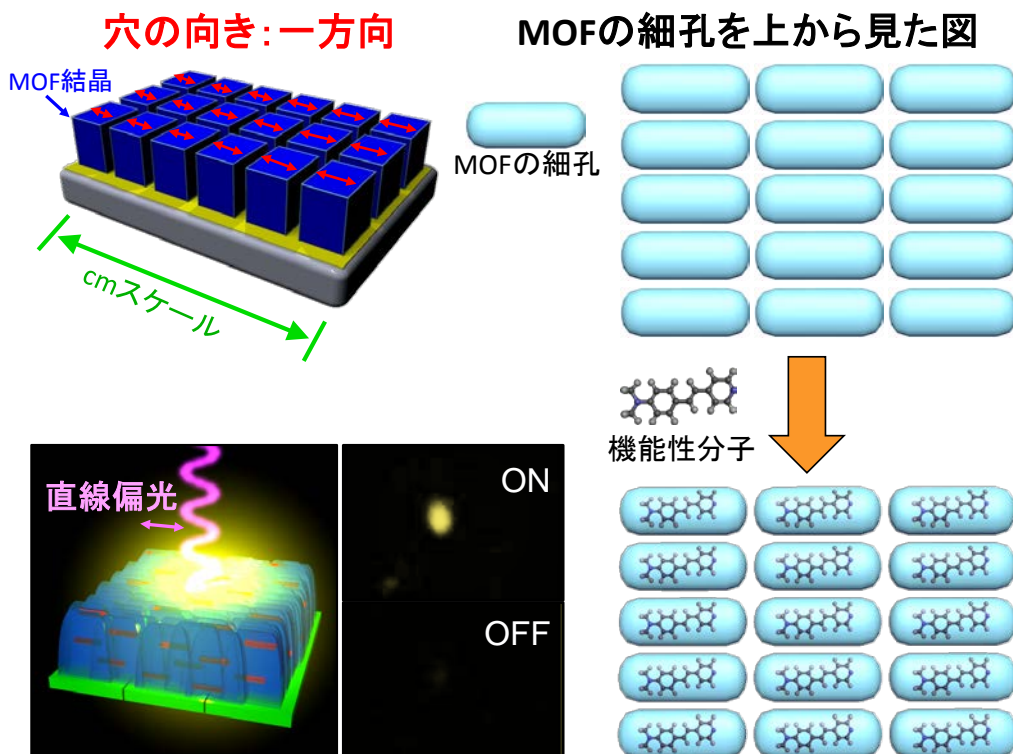


図2 配向MOF薄膜中でのゲスト分子の配列。薄膜全領域で全分子が配列しており、外部刺激に対する応答性が薄膜面内で同一であり、高い機能性の発現が期待される。蛍光分子を入れることでスイッチングが可能な光学デバイスの形成に成功(左下)。

*** 受賞報告 ***

大西 彬聡様 (昭和40年卒 金属13期) が代表取締役をされている株式会社アクアテック様が国立環境研究所及び日刊工業新聞社主催 (環境省 後援) の「平成30年度 環境賞優秀賞」を受賞されました。誠にありがとうございます。「季刊 資源と素材」2018年第3巻4 (秋) 号に掲載されました記事を次項に紹介いたします。

環境賞優秀賞
おめでとうございます！



環境賞授賞式にて
2018年6月7日／霞山会館
(東京都千代田区霞が関コ
モンゲート西館)
共同受賞：
株式会社アクアテック
イコールゼロ株式会社
マツイマシン株式会社

「環境賞優秀賞」受賞にあたって 大西彬聰

(正会員 株式会社アクアテック 代表取締役)

1. 環境賞受賞

当社は平成30年度「環境賞 優秀賞」(主催：国立環境研究所，日刊工業新聞社，後援：環境省)を受賞致しました。これは「ガスセンサー制御硫化物法(NS法)」の開発と事業に与えられたものです。「このことは一重に，多くの方々の協力があったからだ」と思っております。とりわけ，産総研 原田晃氏・田中幹也氏，早稲田大学 所千晴氏，東北大 梅津良昭氏，造水促進センター殿，NEDO 殿，に大変お世話になりました。心から感謝しております。ここでこの技術の開発の経緯と今後の展望について述べたいと思います。

2. シアン排水処理技術から生まれた新硫化物法 (硫化水素ガスセンサーによる液中反応制御技術 － NS法)

「現在行われている金属排水処理法はほとんど水酸化物法で，100年前と基本的には変わっていない」と思います。このプロセスから発生する汚泥は嵩高く，構造水や雑塩も多くて金属濃度が低いため，再利用されずに埋め立て地などに投棄されています。私は若いときからこのことに矛盾を感じて「何かしなければ」と思っておりましたが，

40代半ばに東京めっき組合からの依頼で高濃度シアン処理センターの建設に携わったことで転職が訪れました。処理法として，高濃度シアン廃液を圧力容器内で高温に加熱して，シアンをアンモニアと蟻酸に加水分解する方式を採用しましたが，金属類が存在するとアンモニアと金属が錯体を形成し，発生する錯体が水酸化物法条件では処理できないため，硫化剤の添加処理を施しました。処理効率が高くなる過性もよく，脱水汚泥の含水率は20%以下で「硫化物法は素晴らしい」と感じましたが，時々発生する硫化水素の悪臭に悩まされました。この問題を解決できないまま，しばらくして会社を辞め，アクアテックを設立しました。前の会社とのバッティングを避けるため，違う領域の仕事をしていたのですが，硫化物法のことをいつも気になっていました。辞職から5年ほど過ぎた頃，「硫化物法での硫化水素発生は反応終点を過ぎてから起こるのではないか」との疑問を待ちましたが，解明手段が見出せず，京都電子工業殿を訪ね色々アドバイスを受けました。実験設備を作製し種々の実験を行った結果，反応槽上部気相部の硫化水素濃度と液槽中の硫化物イオン濃度は比例関係にあり，液相中のわずかな硫化物イオン濃度変化もガスセンサーで検知，硫化剤添加を制御して硫化水素発生による悪臭とコロイド化を防止できることを見出しました。



NEDO 海外水処理事業マレーシアプロジェクト
プロジェクトメンバーと Accot 社近くのモスクで

3. イコールゼロ殿での NS 法の実施

NS 法の設備が世界で初めて産業廃棄物処理会社イコールゼロ（株）殿（長野市）に 2 基導入され、生産規模での処理が実施されました。最初に同社に紹介に訪れたとき、同社技術陣はそれまで硫化物法の実験を相当試みてきたようで、ガスセンサーで制御できるとは信じてもらえませんでした。ただ横山昌夫専務（当時）は熱心に聴いてくださり、NS 法の導入が決まりました。しかしながら、回収硫化ニッケルスラッジを精錬会社や金属回収会社に紹介して回りましたが、どこからも相手にされませんでした。困り果てたとき、前職の時代に、World Resources（米国）が世界的にニッケルを買い集めているとの情報を得たことを思い出し、書面を送りました。サンプルを送るようにとの返答がきて、すぐにサンプルを送ったところ、「このような良質なニッケルスラッジが日本でできることは Exciting だ」との連絡があり、回収スラッジ売却の見通しが得られたことでイコールゼロ殿への設備納入の実現に至りました。同社の技術レベルが高く、工業運転がスムーズに実施され、続けて翌年、2 倍の規模の NS 設備 3 基を納入できました。

4. NEDO 国家プロジェクト （有害金属の分離・回収技術開発）への参加

その後、硫化水素による自殺騒ぎが起こり、受注していた案件がキャンセルになったり、風評被害により NS 設備

の普及が困難になった時期がありました。そのとき、産総研の田中幹也氏から、NEDO プロジェクト参加を呼びかけられ応じました。NEDO プロジェクトの研究において、連続式 NS 法、硫化ニッケルスラッジのリパルプ洗浄法、硫化ニッケルの硫酸ニッケルへの酸化機構の解明、晶析による硫酸ニッケルの精製、電解析出による金属ニッケルとしての回収等の技術を開発、その実績により NEDO 海外プロジェクトへの参画を認められ、マレーシア・Accot 社に実証プラントを建設しました。さらに昨年、中国に NS 法の実験機を、マツイマシン（株）殿を通じて販売しましたが、本年 2 月に実機製作を受注、現在進行中です。

今回の受賞が将来の金属排水処理法転換の契機になればと思っております。



NEDO マレーシア実証プラント（Accot 社）

***** 金属13期忘年会 *****

昭和40年卒 金属13期 仲本 房司

毎年恒例の忘年会も2017年12月2日(土)に盛會にて終わりました。宗右衛門町本店の食道園で、特上の牛しゃぶで舌鼓を打ち堪能しました。

参加者は泉谷・市川・小川・坂田・竹下・日野田・米澤・仲本の8名でしたが、近況報告・昔話・欠席者の状況等話題が山積で時間の経つのを忘れて盛り上がりました。



(写真) なんば宗右衛門町にて

今回は、18時30分開宴の夜でしたが、我々金属13期も良い年齢になりましたので、来年からは昼の宴にしたいと思います。何かご意見・ご要望がありましたら連絡係の仲本までご連絡ください。

***** 平成29年度卒業生の進学・就職状況 *****

◇平成29年度就職状況

	卒業生数	内 訳		
		進学	就職	その他
課程卒	44	32	10	2
修士修了	31	5	25	1
博士修了	3	0	1	2

◇就職先、進学先など

<課程卒>

伊藤忠エネクス株式会社、大阪入国管理局、辰巳屋金属株式会社、日本発条株式会社、NTT東日本、株式会社マクスエンジニアリング、丸紅株式会社、山田ビジネスコンサルティング株式会社、株式会社リクシル、大阪府立大学大学院、名古屋大学大学院、奈良先端科学技術大学院大学

<博士前期課程修了>

虹技株式会社、株式会社神戸製鋼所、株式会社ジェイテクト、シャープ株式会社、新日鐵住金株式会社、株式会社SUBARU、住友ゴム工業株式会社、住友重機械工業株式会社、住友電気工業株式会社、ダイハツ工業株式会社、ダイハツディーゼル株式会社、株式会社椿本チエイン、東京コンピューターサービス株式会社、日新製鋼株式会社、パナソニック株式会社、阪和興業株式会社、本田技研工業株式会社、マイクロメモリジャパン株式会社、三菱重工業株式会社、三菱マテリアル株式会社、株式会社村田製作所、ヤマハ発動機株式会社、ローム株式会社、YKK AP 株式会社、大阪府立大学大学院

<博士後期課程修了>

パナソニック株式会社

事務局からのお知らせ**第20期理事会だより**

第20期第二回理事会が平成29年度11月5日(日)に開催されました。大阪府立大学工学部 金属・材料工学科同窓会の名称変更の提案があり、第20期総会で以下のとおり改称することが承認されました。

新名称:

「大阪府立大学 金属・材料・マテリアル工学同窓会」

第21期第一回理事会は下記日程で開催予定です。
(開催後の詳細はホームページにて掲載致します)

平成30年11月4日(日)
於中百舌鳥キャンパス

※当日は白鷺祭とホームカミング
デーが開催されています

**事業実施報告****1.卒業修了祝賀会兼新入会員歓迎会の開催、及び
卒論修論発表優秀賞等の贈呈 (H30.3.24)**

- ・卒業生(マテリアル10期生)44名を新入会員として迎え入れました。
- ・卒論、修論発表優秀賞等の贈呈
河野会長より賞状と副賞が贈呈されました。

2.第35回マテリアル工学分野講演会の共催 (H30.4.6)

下記の通り、2名の方にご講演いただきました。

- ・大阪府立大学工学研究科 マテリアル工学分野
教授 瀧川 順庸氏
「電解析出法による高強度・高延性バルクナノ結晶金属材料の創製」
- ・大阪府立大学工学研究科 マテリアル工学分野
特別助教 岡田 健司氏
(平成25年修了、マテ4期)
「一次元金属水酸化物ナノ材料を基盤とする表面機能性創出」

3.第36回マテリアル工学分野講演会の共催 (H30.9.28)

下記の通り、2名の方にご講演いただきました。

- ・オーストリア グラーツ工科大学
准教授 Wolfgang Sprengel 氏
「Advanced Materials Science studies at Graz University of Technology」
- ・大阪府立大学工学研究科 マテリアル工学分野
准教授 池野 豪一氏
「第一原理計算と内殻 X 線分光による局所構造解析：エネルギー材料への応用」

その他

寄付者・物故者・論文発表優秀者等の個人情報については、別途郵送の m t l ニュース送付状をご覧ください。

会費納入・寄付金のお願い

現在、本同窓会会員は 3,154 名、うち 2,252 名の方に終身会費をご納入いただいております。各種講演会等の実施、m t l ニュースの発行、会員情報の整備、在学生への支援など、同窓会活動の活動資金として、同窓会費は必要不可欠となっております。

まだ終身会費をご納入いただいていない方にはぜひともご理解・ご協力をいただき、終身会費をお振込みくださいますようお願い致します。また、ご寄付を頂戴しました方々におかれましては、誠に有難うございました。同窓会活動に有効に利用させていただきます。

ご支援寄付金等の各種お振込みには、m t l ニュース送付状と同封の振込用紙をご利用ください。

《お断り》

既に終身会費をご納入済みの方が、再び終身会費を振込まれた場合、誠に勝手ながら寄付金としてご納入くださったものとさせていただきます。ご理解・ご協力のほど、よろしくお願い致します。

終身会費納入状況につきましては、電話、メール、FAX 等にて事務局までお問い合わせください。

寄付金納入者ご芳名

別途郵送の m t l ニュース送付状をご覧ください。

ご芳名録の作成には万全を期しておりますが、万が一お名前の脱落等がございましたら、何卒ご容赦下さい。ご連絡いただけましたら、次号に掲載いたします。

投稿記事募集

次号「mtl news 第15号」の記事を募集いたします。

奮ってご投稿のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、原稿採否については編集委員会にご一任下さいますようお願い申し上げます。

1. 募集内容：
 - 近況報告、同期会などの報告、わが社の(新)技術、(新)商品などの紹介、ほか
 - ※タイトル、氏名、写真を含め400字詰め原稿用紙2枚以内程度
2. 投稿方法：氏名、卒業の年度及び期を明記の上、原稿をメールにて送付、あるいは郵送して下さい。
 - ※(新)技術、(新)商品などの紹介の場合は会社名と所属もご記入下さい。
3. 投稿先：金属・材料・マテリアル工学同窓会事務局
4. 締め切り：平成31年6月末



(お問い合わせ先)

大阪府立大学 金属・材料・マテリアル工学同窓会事務局
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1番1号

大阪府立大学大学院工学研究科・マテリアル工学分野内

Tel:072-252-1161 (内5735) Fax:072-254-9912

E-mail: dousou@mtr.osakafu-u.ac.jp